

褐—黒色でなめらかである。

スミソニアン研究所の Dr. V.E. Rudd に同定を願った結果、北米からベネズエラのカリブ海地方原産の *Aeschynomene americana* L. で、我国では初めての外来品と分った。よく分枝することからエダウチクサネム（新称）と名づけたい。

他に国頭、恩納村谷茶（タンチャ）、久志村辺野古；中頭（ナカガミ）、嘉手納村兼久、北谷（チャタン）村北谷、北中城（キタナカグスク）村屋宜原、浦添村仲西、那覇市天久などの路傍にも見られる。

本種は分布状態から見ると、沖縄島に侵入してから10年内外と推定される。結実、発芽率ともに高く、自宅では97%以上の発芽を記録した。また緑肥や家畜飼料に活用出来る。これで日本に来ているクサネム属植物はクサネム *Ae. indica* L., アメリカクサネム *Ae. virginica* B. S. P., エダウチクサネム *Ae. americana* L. の3品になる。本稿を草するに当り英国キュー植物園の Dr. G. Taylor, スミソニアン研究所の Dr. V.E. Rudd および Dr. E.H. Walker に御世話になった。また東京都立大学の水島博士は校閲をして下さった。以上の方々に深謝を捧げる。（沖縄宜野湾市■■■■）

#### ○食用果実と食用具との関連を暗示する名について（前川文夫）Fumio MAEKAWA: Etymological note on edible nuts and shells in Johmon Era

これは多分に推定を含むものであるが、命名上の規を一にしていること、命名の時代と場所との特異性から提案するものである。それはマテバシイ、スダジイ、ツブラジイの名である。御承知のように、この三者は種子に渋を含まず、そのままでも食用になしう点、多量にとれる点で秀れた拾収経済上の食品である。ところでシイの語源はわからない。或はこのシとカシのシとは共通のものかも知れぬが、それは将来の研究でとけることを期待して、シイという食糧となる一群の果実があり、それにマテバ、スダ、ツブラとつけて区別をしたに違いない。これら三者の平行的な命名を考えると、三者の平行的な分布と利用が考えられ、それは日本文化発祥の北九州であったのではなかろうか。そしてそれは遠く縄文時代にまで溯れるであろう。曾て千葉県加茂遺蹟（縄文）から発掘されたマテバシイは少し若い頃に果実のへたの部分をつんで、中味を押し出して食べたと思われる歯型を明らかに残したものがでていて、縄文人の食糧として十分な資格があった。

ところで北九州とすると、ここに一つのヒントがある。それは有明海のマテガイである。マテバシイの太くて長く、且つ、つやのある果実は、他の2種のシイにくらべて異色があり、これはマテガイの連想で区別されたであろう。マテバシイはマテジイともいい、マテに似たシイである可能性は高い。そうするとあとの二つがにわかに意味を持つ。それはツブラはツブでタニシである。スダは何か。シタダミのはいもとほろうトコ

ロヅラ、などと記紀に出ているように、トコロヅル（オニドコロ）がシタダミのはいつくばっているようにはっているとたとえたシタダミは、これも巻貝でニシキウズ科に属し、キサゴの仲間でもシタダミとよばれているものである。これも恐らく昔は食用にしただろう。インダタミという名の貝もこの仲間だが、これもいかにも打ってつけだが新らしい名であるから論外である。シイの仲間のあのささくれた殻斗はシタダミの印象であり、それから顔を出した実の存在はツブの印象であろうとすると、これはマテと相俟って甚だ可能性を増してくる。まして縄文晩期に米が揚子江流域から導入されて生活が豊かになる前には、これらの貝とシイとは互いに重要な食糧的意義を持っていたとみると、生活に即した名として名の起源の法則とも一致する。

まとめると縄文終期から晩期に少くとも北九州でシイと食用貝との命名上の関連が生じた。それは次のようである。

マテガイ	→	マテジイ、マテバジイ
シタダミ	+シイ	→ マダジイ
タニシ（ツブ）	→	ツブラジイ

因にタニシの語はツブより新らしい筈である。それは海岸生のニシが先で田にみつかるようになってタニシであるから、水稻耕作が導入されてから生じたツブの生活環境の拡張、即ち水田への進出、その利用でタニシの名が意味を生ずるからである。

またこれも一つの疑問であったことだが、神武天皇の例の宇陀の高城に鳴わな張るの歌の中に、瘦せたタチシバ即ちブナに対比して太ったイチサカキが出てくる。これは私は以前にイチイガシと考えた。今もそれでよいのだが、イチイガシはイチガシ、イチは乳で甘い実のカシでなければならぬのに、どうして他のカシのドングリとそうもへだたりのない今のイチイガシを甘いカシというのかは私に疑問であった。今にして思えばマテバシイこそイチサカキでもあったのではないか。神武天皇の歌もそれであるなら一層適切である。そして後世どこかで今のイチイガシを果実以外の点で認識するようになって、マテバシイのイチサカキが転用乃至は誤用されたものであろうか。カシ類中、葉の性質が一番マテバシイに似ているのはイチイガシであることは一つの手掛りと思う。

（東京大学理学部、植物学教室）

□植物形態学会会報「かたち」 1968年2月発刊。上記の会の機関誌、まだ4頁のパンフレット。論説として、系統形態学への示唆(西田誠)、発生途上でのゴマの胚の方向転換について(埴順)、東北大、理学部、生物学教室、形態学研究室の紹介、写真から線画をつくる方法(福田泰二)、各大学紀要にのった形態学関係論文リストなど内容充実。今のところ年2回発行の予定。会員にのみ配布。申込は東大、理学部、植物学教室内系統・発生研究室気付。会費年500円。

(前川 文夫)